ほない歴史通信
第３３号
2004.12.1

「ほない歴史通信」の役割

―『大子風土記』の編集を終えて―

今から六年前、私はある雑誌に、「地域史を紡ぐ手づくり情報紙」と題して「ほない歴史通信」のことを紹介しました。まだ八号しか発行してない段階で、いつまで継続できるかわからない頃でしたが、私は次のような「夢」を吐露しました。

「創刊から一年半余、情報誌としてはまだまだの感が強い。今後どのような方向に成長してゆくかは予測できないが、私は密かに次のような願いを抱いている。これから号数を重ねていった将来のある時、例えば特定の欄の記事を集成したならば自ずから一冊の歴史書になるというほどに記事の内容をより充実させてゆきたい」（『記録と史料』第九号）、と。

ここしばらくは、執筆者の輪が広がったせいもあって、「ほない歴史通信」の紙面は自由にテーマを設定した原稿を中心に構成されていますが、当初は、「ふるさと写真帖」欄、「ふるさと再発見」欄、「文化財散歩」欄、「史料館めぐり」欄、「資料紹介」欄等々を設け、編集委員が回り番のような形で執筆していました。引用した文中の「特定の欄」とは、このことを指します。

ともあれ、六年前に描いたこの「夢」が間もなく実現しようとしています。「ほない歴史通信」に寄せられた原稿がひとつの母体になって、来春、『大子風土記』という書物が出版されることになりました。その編集作業を、今、ようやく終えたところです。

「ほない歴史通信」には、町の内外から実に多くの方がさまざまな問題意識に基づいて、さまざまな視点から寄稿しておられます。「大子という地域社会のもつ多様な歴史とその豊かさを後世にきちんと伝えること」が創刊の趣旨である点を想起するなら、ほぼ狙い通りの紙面構成を維持できているといっても過言ではないと思います。『大子風土記』には、編集の手を経たその原稿が多数盛り込まれています。

ひとつのテーマについて二～三ページという限られたスペースではありますが、『大子町史　通史編』では扱われていないことが、あるいは不十分にしか叙述されていないことが『大子風土記』のなかで明らかにされています。いくつか例をあげると、男体山頂の境界争い、八溝山と校歌、奥久慈の木地師、楮蒸し、久慈川の漁、八溝嶺神社の遠鳥居、郷土食「やきもち」等です。編集作業に携わりながら、不明であった地域の歴史に光が当てられていく快感と大子地方の歴史の多様さ・奥深さを改めて実感しました。

折しも、全十八回に及ぶ「大子町ふるさと歴史講座」が毎月開かれています。聴講生の方々の熱心な態度を拝見していると、「ほない歴史通信」に寄稿してくれるゲスト執筆者がここからまた何人か生まれることを期待したくなります。執筆者の輪がさらに広がり、地域の歴史が掘り起こされていくならば、このささやかな通信が再び産婆役となって『続　大子風土記』の発刊に結びつくことも夢ではないような気がします。地域史を紡ぐ役割の大きさを感じざるを得ません。

（齋藤典生）

道坂峠ー南郷街道の道筋

道坂峠を通る街道は、江戸時代は南郷街道と呼ばれた。加藤寛斎の『常陸国里程間数之記』に「堂坂は洞坂、道坂とも書く」とある。また『水府志料』に「とう坂、街の南にあり。登ること凡二十六町四十間、部垂村（現大宮町）及び水戸への道筋なり」とある。洞坂峠は塩沢と槐沢とのほぼ境にあり、地理的には八溝山系鷲子山塊の北端にある標高四四三メートルの太郎山の山腹や渓谷、尾根を通る南郷街道の道筋にある長い峠である。この街道は、水戸から大宮あたりまでは平坦な道であるが、山方から以北に入ると久慈川の流域や曲がりくねった険しい山道となり、難所が多かった。前掲『常陸国里程間数之記』によると、盛金について「此処保内の往還大難場トス。通行ノ旅人此嶺ノタメニ苦悩ス。アルイハ折々ケガアリ死ス。」とあり、また頃藤ー大子村間については「頃藤ー大子便路、堂坂ノ難所アリ。」とあるように、盛金と道坂峠は南郷街道の中では最も難所であった。

難所だった道坂峠

この道坂峠周辺一体は、『水府志料』に「金穴、街より南、どう坂の左右にあり、佐竹氏の領するころ、多く金出たりといへり」とあるように佐竹時代は金の産出地として知られていた。そのほか佐竹領の金山として保内（大子）地方では、八溝、金澤の金山等があった。現在でも金坑跡が随所に見られる保内地方の金山は、慶長七（一六〇二）年佐竹義宣の秋田への国替えによって廃坑となった。その後水戸藩によって保内地方の金山の採掘が続けられ、寛永年間（一六二四～四四）の前半のころが盛況だったという。この当時は塩沢金山が中心で塩沢村が誕生し、「塩沢千軒」といわれるほどにぎわったが、正保～万治年間（一六四四～六一）のころになると産金は衰え、金山は廃坑となったので村は崩壊した。

また、この峠周辺の槐澤の渓谷から良質な硯石が産出し、小久慈石と呼ばれ、藩政時代から知られていた。小久慈石は、金山系の硯石で黒色の粘板岩、頁岩で鋒鋩のたちがよく、硯の三要素である磨墨、廃墨、落墨にすぐれているといわれている。水戸藩ではこの槐沢周辺一帯を「お止め山」とし、許可なくして山に入り、採石するのを禁止するとともに藩主自らが国壽石と名付け、藩として原石を独占的に採取した。明治時代には採石し、加工販売しようという動きがみられたが、原石の産出が少なく採算の上から工場経営にはいたらなかった。そのため一部の愛硯家によって趣味的に愛硯用に作硯が続けられてきた。

道坂峠は、水戸藩の武田耕雲斎、藤田小四郎らの率いる天狗党軍と大子郷校の学監をしていた黒崎籐右衛門の率いる諸生党軍の交戦があった所である。元治元（一八六四）年三月二十七日、藤田小四郎らは武田耕雲斎を総師に攘夷の実行を促すために筑波山に兵を挙げた。その後筑波山を下り、戦いは水戸、那珂湊に移ったが天狗党に勝ち目はなかった。武田耕雲斎、藤田小四郎らは北上して、十月二十七日大子に集結した。大子にて隊を整え、京都にいる将軍慶喜を頼って上京し、自分たちの考えを訴えるために十一月一日大子を出発し、左貫の関の田和峠を越えて野州に出て将軍慶喜のいる京都を目指して西上の途についた。天狗党の西上は希望と絶望への途であった。

太郎山の西側を走る南郷街道は、明治三十六（一九〇三）年大子ー水戸間に県道が開通するまでは、大子と水戸を結ぶ生活道であり、大子地方の人々の生活や産業、文化に大きな影響を与えてきた街道である。しかし、急峻な地形は道路の開発を妨げ、また近代に入って水郡線の開通やバス交通の発達によって人々から忘れさられている。

（小澤）

【古文書よりみる古里探訪②　『美ち艸』】

もう一つの八溝山と釼山

飯村尋道

国道一一八号を、福島県矢祭方面に向かい川山の見落橋あたりから車窓の北を望むと、久慈川を挟んだ右手奥に、福島との県境の山岳が見えてくる。高い峰が二つ、右手奥のてっぺんに大木が立ち上がり針葉樹に被われた高い峰の方が八溝山（宮川八溝・小八溝）、その左手の一段低い針葉樹の尖った峰が釼山（劔山）である。ともに奥州と常陸の国境に一大聳える高峰である。

八溝山と云うと、三県下に跨がる茨城県最高峰の海抜一〇二二メートルの八溝山しか知らなかった。「もう一つの八溝山」の存在を知ったのは最近のことである。この八溝山も釼山も山岳名が地図に載っていないためか地元以外では一般に知られていない。

しかし、江戸時代は文化三年（一八〇六）、郡奉行の雨宮端亭の著した『美ち艸』に「釼山と云う古鍛冶有て刃釼をきたへたる故、此名有と云う高山也、此所に井有、旱魃之年、里人口水動し雨を乞へハ願有といふ、少し東に小八溝と云う山有」と、釼山と小八溝について紹介している。

八溝山の裏側にあたる矢祭町の秘境、山下字荻の寺島忠氏の道案内で、『美ち艸』にある「小八溝」と「釼山」に登って見た。

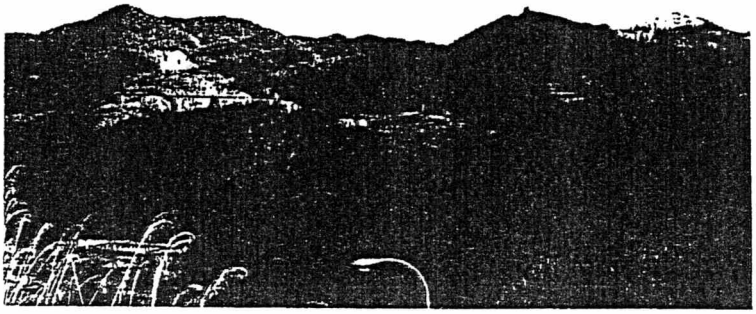
小八溝には、下野宮の桐ノ草や源五郎からも登れるが、高久からの道から入山する。杉・檜の鬱蒼とした林間を進み、無残に朽ちて倒れた木造の鳥居を跨いで急坂を登ると、海抜四六四メートルの山頂である。山頂の土坦をめぐらした凹地には、化け物の様な榧（カヤ）の巨木を背に大小二つの石祠が鎮座する。

大きい石祠が八溝領神社で、礎石から屋根まで高さ一一〇センチの流れ造りである。屋根の妻には菊のご紋章、左側面に「大正四年旧四月十七日建之」と刻まれている。旧四月十七日は八溝山の祭日である。

石祠の中には、表に「八溝領□□・・」、裏に「水戸中納言□文宮代寶暦四甲戌三月、八溝領神社御分霊、明治廿五年、世話人、下重□□」と記した棟札が一枚あり。この棟札から推察すると、寶暦四甲戌年（一七五四）に、上野宮の八溝領神社の御分霊を、この山上に迎えて祀り、八溝領神社として尊称したのであろう。爾来、本家の上野宮の八溝山に対して、こちらは「小八溝」とか「宮川八溝」と称したのではないか。　てっぺんに大木の立ち上がったのが、国道から見えるが、これが御神木の榧（カヤ）の木で、大人三人が立って入れる程の洞が開き、胴回りは五メートルもの見事な巨木である。

地元の古老によると、「八溝山は嵐除けの神様なので、昭和六十年頃までは桐ノ草と高久の部落で、毎年九月五日に新しいヘイソクを切って赤飯やお神酒を持ってお参りに行った。昔はカヤバだったので見晴らしがよく大子町いっぱいが見えた。子供の時は榧（カヤ）の木に登ってよく遊んだ。」と云う。

次に、日をあらためて釼山に登る。道案内は同じ寺島忠氏。仲野の樋ケ沢の林道から釼山に入山する。



剱山（左）と宮川八溝（右）

剱山については、地元の古老によると「昔、刀鍛治がいて、七合目あたりに畑を起こしたような跡があり、水が溜っていて猪が水浴びしたような跡がある。ああいう高い所に水が出て旱魃でも涸れない。その水で刀をぶったのだろう。『カナクソが出んだ。』と聞いている。昔の道は、北原から上がって鳥居をくぐって上がっていく。頂上には雷神様のお宮があって、仲野と北原と石原の三十九戸で二月二十五日にお祭りしている。オベットサマからお札を受けて神棚にあげた。」と云う。

雨宮端亭の『美ち艸』にみえる剱山の記述と、地元古老の話が一致していて興味深い。剱山は、奥州（矢祭町）と常陸の国境に一大聳える高峰で海抜が三七四メートル、その山上には雷神様の石祠が祀られている。礎石から屋根まで高さ一一〇センチ、『明治三十年旧六月二十五日建之』の入母屋軒唐破風造りのどっしりとした構えのお宮である。お宮の前には『神燈』と刻まれた石灯籠が二基ある。

裏の奥州側は目もくらむような断崖絶壁で、深い谷底から風が吹き上げてくる。山上からは檜山（五〇九メートル）や宮川八溝が一望できる。

編集人　斎藤　典生（茨城大学人文学部）
野内　正美（茨城県立大子清流高校）
石井喜志夫（元　教　員）
小澤　圀彦（元　教　員）
吉成　英文（大子町立給食センター）
鈴木　徹（大子町社会教育課）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
〒319-3551 ☎0295(2)2627